

全国屈指の技術力で顧客獲得 ～適期管理が高品質の決め手～

弥富市 篠田 浩明さん (中辰園芸)
鉢花 (ポインセチア、ゼラニウム)

【平成 24 年 11 月 27 日掲載】

弥富市で鉢花生産を行なう中辰園芸の篠田浩明さんを紹介합니다。篠田さんはポインセチアの仕立て方にこだわり、その生産物は、(株) F A J (Flower Auction Japan) で行われるオールジャパンポインセチアフェアや (株) 豊明花き市場で行われる東海鉢物品評会において、最優秀賞や農林水産大臣賞を始め、毎年のように入賞し、高い評価を得ています。

就農の意思を固める

篠田さんは、小さな頃から鉢花を栽培する両親の背中を見ながら育ってきたため、中学卒業時には漠然と就農を考えていたそうです。ただ、高校3年生の時に参加した海外派遣研修において、全国の農業後継者の就農に対する熱い想いを聞き、就農の意思を固めます。その後、東京農業大学短期大学部で2年間農業の基礎を学び、平成8年に就農しました。



篠田浩明さん(右)と御両親

ポインセチアと向き合う

篠田さんの就農当時、中辰園芸ではポットマムを中心に栽培していましたが、両親からは何か新しいもの始めるように言われました。ただ、当時は、花に対する知識もそれほどなく、何を始めていいのか決めかねていました。その様子を見ていた父親が、地域でも栽培者の増えつつあったポインセチアの栽培を勧めてくれたそうです。

いざポインセチアの栽培を始めてみると、摘心のタイミングを誤るなど、失敗の連続で、市場で値段がつかないような商品もあったそうです。幸い、篠田さんが所属していた蟹江町鉢物部会では、ポインセチアに取り組んでいた生産者が多かったのに加え、鉢物産地にしては珍しく、月一回の定期的なほ場巡回があったため、相談をしながら栽培技術を高めることができました。また、両親もポインセチアに関しては、たとえ失敗をしたとしても、口出しすることがなかったため、自ら試行錯誤を重ねることができました。ただ、篠田さんのポインセチアが市場で評判になってから、「当時は、周りの生産者からは(息子一人にやらせて大丈夫かと)心配されていたんだぞ。」とボソッと父親から言われたそうです。



一鉢一鉢の生育状況を丹念に確認する篠田さん

適期管理が高品質の決め手

篠田さんのほ場に入って、まず目に留まるのが、鉢ごとの生育差がほとんどないことです。また、仕立てについても、違いを見つけるのが困難なほど揃っています。オールジャパンポインセチアフェアを始め、品評会に出品するたびに入賞を繰り返す篠田さんにポインセチア栽培のポイントを聞いたところ、以下の3点を教えてくれました。

- ① 適期管理 ……作業のタイミングを逸さない
- ② 商品イメージ ……荷姿を常に頭に入れておく
- ③ 観察力 ……一鉢一鉢の生育状況を確認する

特に、①適期管理については、一つの作業（摘心、施肥等）が遅れることで、クリスマス前の需要期での出荷が困難になるのに加え、想定している荷姿に狂いが生じるため一番気を使っているそうです。どんなに忙しくても、必要とあれば、ヘッドライトをつけて作業を行うとのことでした。



ポインセチアのスタンド仕立て（左）
ツリー仕立て（右）

新たな挑戦

篠田さんは、今が経営の転換期だと捉えています。品目構成を大幅に見直しており、特に主力であるポインセチアの出荷後に栽培する品目の転換を図っています。

例えば、エキザカムは、注文はあるがロス率が高く、所得として考えたときに収益力が低いため、ロス率の低いゼラニウムなどに転換しました。また、平成22年度からは、取扱い品目の増加と新しい需要の掘り起こしを狙って、甘い香りのするキク新品種「アロمام」の栽培にも取り組んでいます。さらに、篠田さんはオリジナル品種の育成も行っており、平成23年に品種登録された「中辰1号」は、八重咲きゼラニウム「キャンディーボール」として販売され、市場からも好評価を受けています。



中辰園芸オリジナル品種
「中辰1号（商品名：キャンディーボール）」

今後の目標についても、「規模拡大も視野に入れている。最近、自分は花をいじるのが好きなんだと気付いた。自分が作っていて、おもしろいものに挑戦していきたい。」とまだまだ新たな品目への探求心は尽きない様子でした。ただ、取材の最後に語ってくれた「ポインセチアでは、



間もなく出荷を迎えるポインセチア

全国の生産者に負けたくない」との言葉から、篠田さんのポインセチアに対するプライドを垣間見ることができました。現在は、看板商品のスタンド仕立てだけでなく、ツリー仕立てなど新たな仕立てにも挑戦しています。

執筆：農業経営課
取材協力：海部農林水産事務所農業改良普及課